
女の首

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の首

【Nコード】

N2501N

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

「怖い話は…好きですか」

古書肆はそう問う。

私は散歩の途中に見つけた古本屋に引き寄せられていった。初老の店主は不気味な生首の絵になぞらえられた猟奇事件を語りだす。そして、私は気付いてしまった…。

年が開けると寒さは更に増してきた。

吐く息も白い。

家から外へ出ると身を切るような冷たさを孕んだ風が吹いているのだが、それでも私は日課である午後の散歩に出掛けている。当り前のようにいつもしている事だからこそ幾ら寒くても毎日しないと当り前が崩れてしまいそうで何か厭なのだ。

閑静な住宅地を抜けて屋根アーケードすらないような寂れた商店街を歩くと云うのが私のお気に入りの散歩コースだ。八百屋や魚屋、果ては時計屋や駄菓子屋など今となつては古風な、所謂専門店や卸問屋と呼ばれる店が並んでいる。

口は悪いが粹な青果店の親父が店先に冬の風物詩である蜜柑を並べながら、

「おう兄ちゃん、今年も寒くなつてきやがったな」

と私に愛想良く声を掛けてくる。

私もその親父に、

「ああ、寒いな、親父さんも風邪をひかないように気を付けなよ」と返す。

寒い寒いとお互い文句を云い合いながらもその会話の中に人の温かさがある。

今ではそう云った店の殆どがコンビニエンスストアや大型のスーパーマーケットに悉く淘汰されてゆく。そんな中でこのような古臭い商店街を見ていると、どこことなく郷愁的な感傷ノスタルジックを覚えて胸が締め付けられる。

…矢張り散歩は良いものだ。

立ち並ぶ商店の間を強い風が吹き抜ける。私は思わず顔を背けるようにして伏せ、肩掛け鞆の紐を握り締めた。

…もう冬なのだ。

そんな古風な商店街もやがて終わりに差し掛かる。

工事現場の騒がしい音、学校帰りの小学生達の声、遠くの方でパトカーのサイレンも聞こえる。昭和の町からいつもの町に帰って来たような錯覚を覚える。

唯ただでさえ昔臭い商店街の一番端に一際古風な古本屋を見つけた。

その店だけ昭和どころか大正、明治のような更に古臭い雰囲気を漂わせている。本当にそんな時代からタイムスリップして来たかのような印象を受ける。

…こんな店あったか？

私はその古本屋の発する不思議な雰囲気引き寄せられていった。店先には非道ひどく陽焼けして黄色く変色しているいつの物か判らないような古い雑誌や文庫本が並べられている。どの本の著者も見覚えもなければ聞き覚えもない。どうやら相当古い物らしい。

その中の一冊を手にとって頁ページをぱらぱらと捲めくつてみる。それは二十年以上も前の文芸誌らしく本当に時代遅れな内容の短編小説が羅列されている。どれも現代では流行りそうもないようなものだ。

安っぽい再生紙と洋墨インクの匂いが鼻を突く。

私はこの匂いが嫌いではない。

内容は兎とも角かくとして私はその何とも云えない懐古ノスタルジック的な魅力に取り憑かれたように頁を捲つてしていると店の奥から声が聞こえた。

「寒いでしょう、お兄さん」

私ははっとなって肩を引き攣くわらせた。声は薄暗い店内から発せられているようでその主の姿を窺う事は出来ない。

驚いた私はつい本を閉じてしまった。

「そんな所にいないで中へお入りなさいな」

年寄り臭い落ち着いた男の声。

更にその声は続く。

「別に何も買わなくても良いんだよ、いいからお入りよ」

私はその声に誘いざなわれるように薄暗い店内へと足を踏み入れた。

店内はまさに異世界。

小窓から差し込む柔らかな陽光が照らし出す剥き出しのアスファルトの床。密閉された空間に響き渡る雑音ノイズ混じりのラジオの音。所狭しと置かれているくすんだ色をした木製の本棚と、店内にみつしりと充満する古紙の香り。

…まるで本の森だ。

どうやら私はそんな場所に迷い込んで来てしまったらしい。

その不思議な空気に吸い込まれるように私は更に奥へ奥へと進んでゆく。するとそこには魔術のイロハでも記してあるかのような分厚く蔵めしい洋書や、江戸時代の物ではないかと思える和綴じの古書まで陳列されている。どれも手に取っただけでもばらばらと朽ちて風化してしまいそうな程古い。

そんな書物で店内は埋め尽くされているのだがきちんと綺麗に並べられている所為か何故か整然とした印象があり、散らかっているとか汚いとは思わなかった。

私は何となくその中の一冊に手を触れようとする。

「いらつしゃい」

声のした方を見ると、年代物の石油ストーブの横に毛系の帽子を被った小柄な男がちょこんと座っていた。小さな木製の丸椅子に座っている和装の良く似合うその男は中年と云うより既に壮年に近い年齢に見える。

「本は好きですか」

どうやらこの初老の男がこの古本屋の主人であるらしい。主人は口元に皺を作り、にこりと笑いかけてきた。最初は置物か何かが喋り出したのかと思って吃驚びくりしたが落ち着いてよく見ると人の良さそうな親爺さんだ。

しかしその主人は目の前にいる筈なのに少しでも目を逸らすと見失ってしまいそうな程存在感が冴さい。それ程に店の雰囲気なに溶け込んでいるのだ。

「ええ…。時々文庫本を買っぐらいですが。まあ、本は好きですね」
「ああ、それは良かった。折角来て戴いて立ち話もなんですので宜しければお兄さんもお掛け下さいな」

主人は私にも小さな椅子を差し出した。

私も特に急ぐ用事もなかったのでその椅子に腰を下ろし、持っていた肩掛け鞆を膝の上に置いた。

「荷物…こちらに置いておきましょうか？」

よく気の付く親爺さんだ。

「いえ、大事な物ですので自分で持ってますよ」

そうですね、と云って主人は私にストーブの上で温めていた珈琲コヒを淹いれてくれた。私はその珈琲をありがたく頂戴して暫くの間、主人と本の話に花を咲かせていた。

どうやら主人に家族はいないらしく、一人でこの古本屋を営んでいるそうだ。営業日も定休日も特に決まっておらず主人の気が向いたときに店を開けているらしい。普段は閉まっている方が殆どだろうだ。どおりで今までこの店の存在に気付かなかった訳だ。

趣味でやっているようなものです、と主人は云う。

するとまた遠くの方からパトカーのサイレンが聞こえてきた。

「どうしたんだろう…」

「もしかするとこのニュースの事ではありませんか」

主人は今まで無視され続けていたラジオの方に目を遣る。ラジオは私達に忘れられていた間もずっと独り言を呟つぶやいていたらしい。

「いやあ物騒な世の中になったものです」

「何か事故か事件でも？」

「ええ、殺人事件だそうです…しかもこの近所で」

そう告げて主人は珈琲を一口啜する。私は主人が目を遣った嗶しゃがれ声の古いラジオが紡ぎ出す音に耳を傾けた。

今日の正午頃、町外れの雑木林で偶々（たまたま）通りかかった男性によって全裸の女性の変死体が発見された。遺体には暴行された形跡もあり、そして…。

…遺体の首は切断されていたそうだ。

殺害現場に頭部は残されておらず、別の場所に遺棄されたと思われる。女性は二十代から三十代と見られ、警察は遺体の身元確認を急いでいる。

そんな物々しいニュースをラジオは淡々と語っていた。

「いや恐ろしいですね、私も長く生きてきましたがこんな恐ろしい殺人事件は久しく耳にしておりません」

いつの間にか主人は立ち上がっていて、何やら棚の奥をこそそこそと探っていた。彼は私に背を向けたまま続ける。

「殺すだけでは飽き足らず…犯人は何故首を切ったりしたのでしょう。それ程憎かったのでしょうか」

主人が棚の中の物を除ける度に埃が舞い、四角い窓から差し込む光に照らされた埃は水飛沫しぶきのように煌きらめく。私は思わず咳き込んだ。

「おっと、失礼しました…少し不謹慎かもしれませんが首と聞いている話を思い出しましてね。もしお兄さんがその手の話をお嫌いでしたら止しておきますが…」

主人は棚から取り出した筒状の物をぱしぱしと叩たたいて埃を掃はらう。

それは丸めた掛け軸のような茶色い巻き物だった。

再び私の前に座った主人は私の目を熟じつと見据えて静かに口を開く。

「怖い話は…お好きですか」

その言葉には妙な迫力があり、私はその勢いに飲まれるようにゆっくりと首を縦に振った。

「ああ良かった。ではまずこれを御覧になつて戴けますか」

主人は手に持っていた巻き物の紐を解き、中身を開いて見せた。

「これは…いい」

「どうです、怖ろしいですか？」

眉を顰ひそめる私に相変わらず柔らかい物腰で主人は問うてくる。

巻き物には絵が描かれていた。それもおどろおどろしい絵だ。

板の台の上に女の生首が置かれている。まるで斬首刑の後の晒し首だ。女はばらばらと髪を乱していて頭からは金色の簪かんざしが外れかか

っている。焦点の定まらない虚ろな瞳をこちらに向けているのだ。私を見ているようでもあり、はたまた私の遙か後ろを見ているような力無い視線。そして台の上には生々しく赤黒い血が滴っている。力強さと荘厳さを兼ね備えた日本の伝統的な刺青デザインのような意匠モチーフの所為か余計にその題材の発する禍々しさも際立っている。

一言で云うと鬼魅きみの悪い絵だ。

「この絵にはある逸話がありましたね」

「逸話ですか？」

小さく頷いた主人は語り始める。

「二十年程前に若狭の方で起きたバラバラ殺人事件を御存知でしょうか」

二十年前ともなると私は未だ中学に上がったかどうかという年齢だ。物心は付いていたものの明瞭には思い出せない。そんな事件あったような、なかったような。

「女性が自宅の風呂場でバラバラに切り刻まれたという事件ですよ。犯人は未だ捕まっていないどころか特定もされていない迷宮入りの事件です」

人の良さそうな親爺さんには似つかわしくないような物騒な言葉が並べられた。

「泣きながら命乞いをして抵抗する女性を犯人の男は実に愉しそうに女性の四肢を生きたまま切断。そしてバラバラにされた躰はそれぞれ町の至る場所から発見されたという事件です」

…そう云えば。

確かにそんな事件があったのを思い出した。当時テレビで毎日のようにその事件のニュースが流れていたのを覚えている。交番の掲示板でも情報提供を求めている筈だ。

…結局、犯人は捕まっていなかったのか。

「まるで、かしゃ火車の仕業と当時は云われていました」

「火車？」

「ああ、火車とは妖怪、魍魎ワウリョウの類ですよ。悪人の死体を墓から

掘り返してバラバラにして撒き散らすと云った妖怪です。実際その被害者の女性も男を騙して財を奪り取るような悪い女だったようですが」

…なるほど、それは確かに似ている。

私は顎元に手を置いて頷く。

「そして女性の頭部は県境の道路脇にある沼の中から発見されたのです。因みに未だ四散した^{ちな}骸の三割は発見されていないそうです」

そう主人は話を一旦纏めた。

私が少年時代に何気なく耳にしていた事件の詳細は信じられない程に猟奇的で、そして変質的なものであった。

流石に胸糞が悪くなる。

そして…と主人が続ける。声の調子^{トーン}が若干今までと変化している。恐らく話も一転するのだろう。

「その殺された女性がこの生首の絵に取り憑いているんです」

主人が再び絵を持ち上げる。

それが隙間風にはためき一瞬絵の生首がぴくりと動いたように見えた。それは気の所為だったのかもしれないが私の背筋に冷たい物が走る。

生首の女と目があつたような気がして私は逃げるように視線を店内の本棚の方に泳がせた。相変わらず店内は所狭しと本で埋め尽くされている。

「売れなさそうでしょう、私の店は」

私が本棚を見ているのを主人は目敏く察して声を掛けてくる。一見自嘲しているような主人のその言葉だが彼の温和な表情にはそのような念は窺えない。

私は「はあ」と肯定とも疑問とも取れない中途半端な相槌を打った。我ながら間の抜けた反応だ。

「売れなくても、それでも良いのです」

「何故です？ 商売なのに」

少し溜めてから主人は

「ここにある本や掛け軸は私にとって大切なものだからですよ」と答えた。

そして照れ臭そうにこめかみを掻きながら続ける。

「大切なものは傍に置いていたい、だから売れなくても良いのです。寧ろ売れていく本を見るとそれはそれで嬉しい半面どこか寂しい気分になるものです」

まあ古本屋は半分趣味でやっているようなものですから、と話を結ぶと、さて、と洩らして大きく息を吐いた。

主人は絵を巻き直しながら再び話を戻す。

「この生首の絵は壁に掛けていたりずっと開いたままにしているとね、ぶつぶつと怨み事を呟き出すのです。そして時々絵から抜け出してしまふのです、自分を殺した男を探し出して怨みを晴らす為に…」

絵を丁寧巻き直した主人は確りと紐を結んで生首の女を封印する。

「そんな曰くのあるこの絵は様々な人の手を渡し、巡り巡って数年前に私の店に回って来たのですよ」

主人はその絵をそつと耳元に近付ける。

「ほら、少しの間ですが開いていたからもう紐を結んでいるにもかかわらず声が聞こえてきますよ」

主人は私に絵を差し出した。私は恐る恐るそれを受け取り耳に当てる…。何も聞こえない。私は眉を顰める。

「おやおや、聞こえませんか…耳を澄ませてごらんなさい」

それでも矢張り何も聞こえはしない。

「親爺さんも人が悪いですよ。鬼魅の悪い事云わないで下さい」

私は引き攣った笑いを浮かべながら絵を再び開いた。

その刹那、私は凍りついた。

「こ、これはどういう事です!」

私は主人に問い質す。

しかし主人も目を剥き真つ青な顔になって驚いている、否、戦慄しているようだ。狼狽する主人はぼろりと言葉を零す。

「まさか…こんな事が…本当に」

絵の中の生首は消えていた。

絵そのものが消えたのではなく、背景も木の板も、そして板に滴る赤黒い血痕も確りと残っている。つまり生首だけが絵の中から姿を消したのだ。

さつき見た時は確実に女の生首がこの台の上に乗っていた筈だ、いつの間に…。否、そんな問題ではない。そもそも絵がその中から抜け出すなど云う事が現実にある筈がないのだ。その事自体があり得ない。

主人が慌ただしく薄暗い店内を見回す。

「いつたい、どこへ行ってしまったのでしょうか…」

私にも主人の不安が伝染してしまい、同じようにきよろきよろと辺りに視線を配らせていた。

天井の板の隙間、本棚の陰、或いは本と本の僅かな隙間、主人の背後、そして私の背後。

怪しいと思えば本当にどこにいてもおかしくないように思えてしまい云い知れない不安は更に募る。

視線を感じる…

…ような気がする。

生首はどこから私達を見ているのだろうか。

くすくすと女の嗤い^{わら}い声が聞こえてくる…

…ような気がする。

くすくす、くすくす、と。

「この店のどこかに隠れているのでしょうか」

例えば…と、云って主人は長い間を空けてから

「あなたのその鞆の中…とか」

と低く厭に通る声で呟いて私の膝の上を指し示した。

私は小さな悲鳴を洩らし手元にあった鞆の口を握り締めた。

太鼓のように激しく脈打つ私の心臓が今にも口から零れ出しそう
だ。私は非道く狼狽している。

恐らく今の私は怯えた小動物のように情けなく縮こまっているの
だろう。

外を吹く風が薄い硝子窓を叩く。私はその音にも敏感に反応し、
ぴくりと軀を震わせていた。

すると、主人はぷつと吹き出した。

…笑ったのか？

「冗談ですよ、冗談…あははは」

…冗談だと？

主人は実に愉快そうに笑っている。

「いえいえ、怖がらせたりしてすいません。実はこの絵には仕掛け
がありましてね…」

そう云いながら主人は懐から徐に一枚の和紙を取り出した。
おもむろ

「それは？」

「こう云った仕掛けなのですよ」

広げられたその和紙には先程私が見た生首の女の絵。ざんばら髪
に虚ろな瞳、間違いなく巻き物の中にあつたものと同じ絵だ。

「もしかして…」

「はい、お兄さんももうお気付きですね」

主人はにこりと温厚な笑みを浮かべた。

「この絵は元々二重になっていましたね、生首の絵の下にもう一枚、
背景だけが描かれた絵が重なっていたのですよ」

私は今までの自分と主人の行動を反芻する。
はんすう

「…まさか、あの時に？」

ほほほ、と主人は上品に笑っている。

「そうです、お兄さんが本棚を眺めていた時です」

…ああ、矢張り

…大切な物は傍に置いておきたい、の時か。

「その際に私は上の絵を一枚剥がしておいたのです」

「全く…親爺さんも人が悪い」

相変わらず主人は愉快そうに笑っている。

温かい珈琲を飲んだ事と暫くストープに当たっていたお陰で私の
軀は随分と温まっていた。

「じゃあその生首が絵から抜け出すと云うのは冗談なんですね」

「はい、私の創作噺ですよ」

…何かが引つ掛かる。

…何か違和感を覚える。

…何か矛盾を感じる。

「でも引き合いに出された二十年前のバラバラ殺人事件は本当にあ
った事件ですよ、私の記憶にも朧おぼろげですが残っていますから」

そうですよ、と答えて主人は珈琲を啜る。私も同じように少し温
くなった珈琲をごくりと喉に流し込んだ。

「おかしくないですか」

「何がですか？」

静かに洋杯カップを置いた主人は首を傾け怪訝な顔をする。

「確か犯人は特定すらされていないんですよ？」

「ええ、そうです」

「それなら何故、犯人の男と？」

男という単語に強調アクセントを置いて主人に問う。すると主人の顔の筋肉
がぴくりと引き攣った。一瞬だが温厚そうなその表情に翳かげが差した
ように見えた。

「それは…人間を一人バラバラに解体するのに女の力では無理でし
よう、だから私は犯人は男だと思って云ったのですよ」

主人は即座に温厚な笑みを取り繕う、しかしその表情はどこか不
自然に思えた。

「それに『泣きながら命乞いをして抵抗する女性を犯人の男は実に
愉おっしやしそうに』と親爺さんは仰おっしゃってましたけど、それって現場にいた

被害者か、もしくは…」

主人は俯いて黙ったままにいる。

「…犯人しか知らない筈ではないでしょうか」

「……。」

温和な雰囲気纏っていた主人からはその気が消え、みるみるうちに彼の顔は青褪めていく。

「先程、被害者の事を男を騙す悪い女と伺いましたが、果たして警察が被害者についてそこまでマスコミに発表しますかね。私にはそんな事が報道されたとは思えないんですがね…」

主人は皺だらけの両手で自らの顔を覆った。

…まさか、本当に

…この親爺さんが

…二十年前の

…バラバラ殺人事件の

…犯人なのか？

古紙と洋墨インクと珈琲の匂いと共に気不味い沈黙も店内に充満する。

私も口を開かず主人を見据える、主人も押し黙って頭を抱えている。静けさが私達の周りに充満すると今まで無視していたラジオの音声が鮮明に聞こえてくる。ラジオは今日起こった例の首切り事件の続報を伝えようとしている。

どうやら被害者が特定されたらしい。

被害者は斎藤由紀子、年齢は二十八歳。職業は町内のスーパーマーケットのレジ係をしていたとの事。彼女は二ヶ月程前からストーリー被害に遭っていたらしく警察にも被害届を出していたらしい。

主人は音もなく立ち上がっていた。

そして私の顔を熟と見下ろしている。私は釘で留められたように動けない。主人が静かに口を開いた。

「良く気が付きましたね…」

主人の温和な面持ちは消え失せ、いつの間にか鬼のように冷徹な表情になっている。

「この矛盾に…」

私は息を飲んだ。

まさかこの主人は真相に触れてしまった私を口封じに殺そうとも考えているのだろうか。そんな事が脳裡を過るような恐ろしい形相をしている。

「お兄さんは…私を二十年前の事件の犯人だとお考えですか」

「い、いえ。そんな…」

その迫力に押されて口籠ってしまふ。

ふう、と息を吐いて主人は先程までと同じ温和な顔に戻った。

「ああ、実はその事件も怪談に準^{なぞり}える為に私が少し脚色したのですよ、矢張り辻褄が合わない部分がありましたよね。いやあ、お兄さんは鋭いですね」

私はぽかんとして口を開けていた。

「と、云いますと…事件の事も半分は親爺さんの創作と云う事ですか」

「恥ずかしながら…そうです。本当にお兄さんは凄い。全く探偵も真^{まこと}つ青な情報処理能力だ」

どうやら私は褒められているらしい。

「おや、珈琲を切らしてしまいましたね。台所から取ってきますので少しの間、失礼を致します」

草履を脱いで台所へ向かおうとする主人。しかし、去り際に、

「仮に私が犯人だったとしても事件は二十年も昔です。殺人事件と雖^{いえど}もとつくに時効が成立していますよ」

と、不穏な事を云い残した。

そして主人は奥の間へと消えていった。

私は懐古^{レトロ}的な店内に一人になった。

しんとする空間にラジオの声だけが響く。ラジオは今朝の首切り事件のニュースを語り続けていた。

警察は被害者の斎藤由紀子さんに付き纏っていたその男の行方を

追っている。事件発生からそれ程時間が経っていないので犯人は未だ遠くへ行っていないと判断し、この町の国道と鉄道駅に警戒態勢を張る、との事らしい。

私は力なく溜め息を吐いた。

… 当り前を崩したくないのに。

どうやら主人の珈琲のおかわりを頂く事は出来そうにない。残念な事に私には急ぎの用が出来てしまった。

… 当り前を崩さない為に。

あの女が悪かったのだ。

あの女が私を無視し続けるから。

私はこんなにも真剣なのに。

私はこんなにも愛しているのに。

斎藤由紀子が…

… 由紀子が悪いのだ。

私が毎日彼女の働いているスーパーに顔を出しているのに、レジで彼女に私の電話番号を渡しても一向に連絡はなかった。

彼女の自宅を調べて毎日手紙を郵便受けに入れていたにも拘らず、彼女からは何の返事もない。

拳句の果てに私をストーカー扱いして警察に届けただと。

… 全く巫山戯ふざけている。

私は唯、純粹に彼女を愛しているだけなのに。何故私は毛虫のように嫌がられるのだ。何故私を受け入れようとしない。

… 何故。

… 何故だ。

今朝もそうだ。

返って来ない手紙の返事にいい加減じれなくなった私は彼女が仕事に向かう途中を待ち伏せて、直接気持ちを伝えようとした。それなのに… いったい何だ。

彼女は私の顔を見るなり真つ青になつて悲鳴を上げたのだ。未だ私は何も云つていないのに……私の云う事には聞く耳持たないと云つた様子だった。

流石にカツとなつた。

私は彼女の口を押さえて黙らせる。人目に付いたら拙いと思ひそのまゝ道路脇の雑木林に彼女を連れ込んで落ち着かせようとした。それでも彼女は一向に抵抗し、暴れ続ける。

彼女を静かにさせなければいけない。

私は彼女の首を力いっぱい絞めていた。

やがて彼女は抵抗を止めて、ぴくりとも動かなくなっていた。私は彼女に乱暴を働き、傷付けてしまったと後悔したがその気持ちも直ぐに風化していったのだ。

動かなくなり、しおらしくなつた彼女はとても美しかった。私は彼女の服を脱がせてその軀をまじまじと凝視^{みつめ}ていた。

本当に美しかった。

……大切な物は傍に置いていたい……か。

確かに主人が云つていた事にも頷ける。否、寧ろ全くその通りだ。私はその美しい彼女が常に傍に居て欲しいと思つた。しかし彼女の軀総てを持つて行く事は出来そうにない。

……彼女の一番美しい所はどこだろうか。

私は肩掛け鞄からサバイバルナイフを取り出す。元々そのナイフは彼女が騒いだり暴れたりした時に脅してでも大人しくさせるように念の為、持つて来たものだったのだが残念ながらその時に使う事はなかった。

……彼女の一番美しい所は

私は彼女の喉元にナイフの腹を当てた。

ラジオは軽快な音楽と共に自動車の^{コマーシャル}宣伝を流し出す。

店の入り口から本棚の間を縫つてひんやりと清々しい冬の風が通り抜けてくる。古紙の香りに混じつて冬の匂いがする。

彼女は漸く私を受け入れてくれた。

今、彼女は私の傍で穏やかに眠っている。やっと私の気持ちが通じたのだ。私は今、心の底から幸せを感じている。

一人ぼっちになり、急に彼女の顔を見たくなった。

私は肩掛け鞆を静かに開く。

…ごめんよ

…息苦しかっただろ？

鞆の中には虚ろな瞳をした由紀子が居る。眠たそうな顔をした彼女はまるで少女のようにあどけなく可愛らしい。

私は美しい由紀子の顔を鞆の中から抱き上げて、抱きしめた。

…ああ、愛おしい。

由紀子は眠たそうにしているても自分で目を閉じる事が出来ないの
で私が優しく瞼を下ろしてあげる。

そして由紀子の顔に掛かる髪を退けてあげて私は彼女に接吻くちづけをする。

彼女の唇は柔らかく、そして、少し冷たい。

遠くで聞こえていたパトカーのサイレンが少し近付いて来ている。
そろそろ私は行かなくてはならない。

いつも通りの、当り前の生活を守る為にも。

由紀子と二人で…。

私は由紀子を鞆に戻す。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501n/>

女の首

2010年10月8日14時28分発行